

検診でみつける運動器疾患

岡田 慶太

東京大学医学部 整形外科

『運動器疾患』と聞いてピンと来る人はどの程度いるだろうか。運動器とは脳、神経、筋肉、骨、関節、靭帯、腱など体を動かすために必要なパーツを総称して使う言葉である。日本整形外科学会ではこの運動器という言葉を広め、さらにはロコモティブシンドローム（ロコモ）という概念を提唱し、寝たきり人口の削減に取り組んでいる。ロコモとはこれら運動器が衰えることで日常生活に支障をきたし、各種臓器にも悪影響を及ぼすことを言う。現在は高齢者やがん患者を中心に広められているが、近い将来小児の運動器疾患についても取り組むのでは、と密かに期待している。こどもの検診では運動器疾患をみつけるための項目がいくつもある。乳幼児健診では股関節やO脚などの変形を、小学校では側弯や尖足などを見つけるために運動器検診が新設された。ほとんどの自治体では検診を小児科や内科の先生が担当され、問題が疑われた場合に整形外科受診を勧めている。しかし、実際には自治体によって一次検診で再検査が一例もないところがあり、システムに何らかの問題があるのでは、と考えざるを得ない。最近では股関節脱臼の発見遅延例が増加していることが社会問題となり、乳幼児股関節健診のチェックリストが作成された。開排除限があれば自動的に二次検診へと進み、その他の4項目（1. 皮膚溝の非対称 2. 女児 3. 家族歴 4. 骨盤位）のうち2項目以上が該当した場合も二次検診へと進むようになっている。これを徹底したことで、小児科医は躊躇せずに整形外科に紹介できるようになり、受診者数は急増している。理想的にはすべての疾患でこのようなスクリーニングができれば良いのだが、現実的には難しい。したがって整形外科はもちろん、小児科、保健師、保育士、教育現場の先生など様々な職種や立場の人が異変や異常に気づけるようになり、専門家へのコンサルテーションが簡単にできる体制が必要である。本講演では整形外科の立場から発育性股関節形成不全（先天性股関節脱臼含む）などの股関節疾患、脳性麻痺などの麻痺性疾患、脊柱側弯を中心とする脊椎変形、扁平足などの足の問題など比較的頻度は高いが見逃されやすい疾患についてどのような点に注意して観察すべきかを解説する。より多くの人がかどもの運動器に関する知識を持つことで、早期発見早期治療につながり、子供たちのロコモ予防ができるのではないだろうか。